和文教科書

かゝ物語ぬきほ

四卷

成五年十廿宇

共八

ホ 2
218
4

東京高等師範學校圖書
門 東洋 No.2
號 218
巻 4

和文教科書四之巻

美濃　源　歌子編輯

一　かゝ物語ぬきほ

むかし、王子猷、山陰といふ所に、きみけり。よの中の淳ゝしひよ、ほゞされずして、春の花、秋の月よのゝ心をすまゝつゝ、おほくの年月をたくりけりゝことにふれて、なさけふかき、人なりければ、かきくもりある雪、ほゞめてはれ、月のいとうきふゝすさまじき夜、いとうおきゐて、なぐさめが

たくや、たぼえけん。たゞせ船よ、棹さゝつゝ、心にまかせて、戴安道を、尋ゆくに、道のほどはるゝゝて、夜もあけ、月もかゞゝづきぬるを、ほいなゝず や、たもひけん。かくともいはでかどのもとより、たちかへりけるを、いうといふ人、ありければ、もろともに月みんとこそおもひつれかゝらずへあはんものかをとばうりいひてづひにかへりぬ。心のずきたるほどい、こしまして、思いまるべし。戴安道ハ、剡縣といふ所よ、すみけり。此人の、年ごろ、なれなるり。たゞ、さまに、心をすまし

たる、人、まてるん侍りける。

むかし、元和十五年の秋、白樂天、罪るくして、江州といふ所に、ゆきさし、ぬ。其次の年の秋、入江のほとりに、夜、なをたゝりけゝ。松風波の音をきくに、うれへの涙いとゝおさへがゝ。かくて、さよふけゆくほどゝ、空すみわたり、月新、波よ、たゞへるを、みるにつけても、わが身ひとつ、ゝ、ゝづまざりけりと、思ひみだれつゝ、人もなぎさを心ぼそくて、あゆみあくに、波のうへ、ゝ、るかゝ、びそのまゝべ、さまゞに、同えて、かきあはせるごの、あわさ

こたぐり
をぐりも、
對話のこと　二
とゝむ、ある
こと、徒然草
の頭書よいへ
るなり。されば
こても、たゞあ
りといひてお
ろぐき所あり。

ま、世に、たぐひなき、ほどもなう。これをきくに、あわ
しき心、なさへかゝ。あま人、ものゝふよりも外よ、
誰かは、又なさけあるべきと、たぼえければ、こゝ
をさるべきて、誰の人ぞと、尋ねとふに、我は、こ
れ、あき人のめなり。昔、はひ十三にて、琵琶を、か
らひえることと、世にすぐれたりき。みかどの、御
まへにて、ひとたびひきゝべーに、百の御ひきで、畑
を、たまひき。又、みめかたち、ありがたくめでゝし
き、ほどなりしかば、みる人きく人さふがゝ、思ひ
をかけ、心をつくせりき。されども、春をぎ、れく

れて、みめかたち、あかしもあらず、たとへよ
しかば、世にふるちからも、うせはてゝ、せんかくな
く、ふりにしよわ、あき人よ、琴をひきびて、母國
のたゝとなりきゝ。あき人なさけふかければ、ふれ
を慕むこと、いとあさし。我を、ねんごろにせねば、
出ていぬるのち、立かへるほど、久しかへるほど、
たそければ、たのづかまさずしもあらずかゝ
るまゝ、たゞ、むなしき船をまもりつゝ、秋の
月は、白きをのみ見るといへり。白楽天、わかびと
の、あををきゝてうれへふうし。又、このかたゝひを

きくにとりかゝねたる、こゝちす。我も、君も、うれへの心、たゞかゝるぞやかるゝず、そのうれへに、つきせぬことを、思ひまるべしゝやれいまゝ年のあけくれ、つうさをのがれ、都をはるれて、此所にまづめゝ。又、やまひに、ひとりにふして、立ゐることたやすかゝずいと物心ぼそき、海づらの、波風より外は、立まゝる人もあき、すみうゐはあれはは葉をわるゝ、あゝしをちこち人の、毎よばふ音のみ、聞えていまゞがくのこゝをきかずこよひの、君が琵琶のこゝをきくに、ほとゝ、天のがく

をきかんがごとし。これをきく人、みな涙をあゞせり。其中に、白楽天、ひとり、袂にもぬと、みえけり。

いゝへにありへことを、つくさずば袖に涙のかゝらまゝやは、此人は、その中に、人の心は、皆にごれるをうしとや、思ひけんひとり、すまして、つねは、都にあこがれをゐん、とゞめざりける。

むかし、賈氏といふ人、たゞひるゝかゝちわろくて、顔うつくしきめをるんもちたりける。此女、かゞうり、みにくき、人にも、ゝず、あひそめにけれ

ば、くやしきこと、とわかへすばかりに、おぼえけれど、ふかひなくて、あるべくもあらずに、ものこと、あきこと、すべて、物もいとゞえもわらはで、よのつねいむもぼいれてのみ、すぐしけるを、をとこ、たゞひとくうしと思ひて、この女よ、ものをいとせ、うちゑませてゐばやと、志けれども、いふにも、かひなくて、三年まで、なりにけり。春の野に出て、もろともに、あそひ侍りけり。雉子とふ鳥は、澤のほとりにたちゐ侍りけるを、この夫、ゆみやをとりて、名をえうりければ、此きゞすを、たちど

ころに、いろいろしてけりゝこれを、みるに、年ごろ、みくさも、わすれて、ものいひ、うちゑみたりければ、夫、うれしさ、たゞひとくちおぼえて、

きかまほしいもゝがみとせのことのはを野澤のきゞすえだ〳〵まゝかばこれをきくよこそ、

よろづのことよくせまほしけれ

むかし、梁鴻といふ人、孟光に、あひぐして、年ごろすみけり。此孟光世にたぐひなく、みゝわろくて、これをみる人、心をまどはすべきさわぐほどなりけれど、此をとこ、まことにあきものに思ひて、かしづ

きうやまふこと、思ふもすぎたりけり。あさふゆふるに、いひがひとりて、けこのうつはものに、もりつゝ、まゆのかゝに、さゝげて、ねんごろに、すめけれバ、齊眉の禮とぞいまゝいひつたへたる。

さもあらバあれ玉のすがゝも何ゝずふたごゝろなき妹がためゝハ心ざしだよ、あさからずバ、玉の姿、花のかゝちゝずともまことに、くちをしかゝらじ。

むかし、相如といふ人、ありけり。世に、たぐひあきほとゝよ、まづしくて、わかなかりけれど、ゝろづの事をたゝざえ学ぶゝびあうして琴をぞめでたくひきける。卓王孫といふ人の、もとにゆきて月のあゝき夜、よもすがゝ、きんをたゝべて、おたるに、此家あるじのむすめ、卓文君といふ人、あはれよ、いみじくたぼえて、つねハこれをのぞめでき、ようじけるを、此卓文君が父ハ、相如にちかづくことを、いとゝいとくみけれど、ことのねもや、あはれと、思ひたゝみにけん。このをとこに、あひにけり。女がゝの父、卓王孫ハ、よろづれたかゝに、あきみ

ちて、よのわびしきことを、さゝぎりけわ。かゝれど、このゝびゝ人に、あひぐしたる事をゝと、心づきおきことふ、思ひよりて、いうまも、むすめのゆくへを、さゝぎりけれど、霧ちり、くるしと思はでなん、年月をすごしける。この夫、蜀といふ國へゆきける道に、昇仙橋といふ、はしありけり。それを、あゆみわたるとて、はしだらに、物をかきつけけり。我、大車、肥馬にのらずば、又、このはしをかへり渡ゝじとちかひて、蜀の國にこもりにけり。其後、思ひのごとくめでたくなりて、此はしをふん、

かへりわたりたりける。女、さしごろもづくして、あひぐしたる、かひありて、さきしきうときゝ人ゝも、たゞひとくゝらやみけり。

さゝづみつゝわがかきつけしことの紫の雲居にのぼるはしまであかける心あゞくて分をもてけゝぬふん、今も、昔もおほいみゞくこそ同ゆれ。

むかし、石季倫といふ人、ありけり。ゆゝしたゝらに、あきて、世のまづしきことを、さゝぎりけわ。金谷のそばゝうちに、五百のまひゞめを、あつめ

て、ぶらぶらしたのしむこと、ぶるひうをわうぢ。このうちに、緑珠と聞ゆる、舞びめなん、あまたの中なもずぐれたりければ、効にかゝぶりうあさからずだなへりけり。かくて、月日をおくるに、時のまつりごとをぞれるく人孫秀、この緑珠がたぐひあきあるさまを、きくたびゝ、いとづてるるぞんことを、ねんごろに、思へりければ、たへかねていろにいでぬ。石季倫が、ぼうるきになすとも、心ぶるかゝじと、たもへるを、此人まけじ心のいちはやさに、つはものをあつめ、いさほひをきはめて、心ざしをぶる。此ときに、緑珠は、はるかに、高き楼のうへにあがりけり。石季倫がの人れ、てに志たがひて、ゆくゝ、をを、あはせて、誰ゆゑにか、かくいたりぬると、いひけるに、たへ思ふべきこゝろもせざりければ、楼の上より、身をなげて、志なんとすることを、効にまきるゝ、ものやいあると、いさこるる人あきゝありけれど、つひにきうず。

　たゞれなてふげかんまりいけのまに志なんいのちをしかゝるゝに、ことかく思ひけん心のありがゝさも、いつくすべゝず。

十

むかし、徳言といふ人、陳氏とゆゆる女に、あひぐして侍りけり。かゝるに、いとたかしげまて、心ばへあど、思ふさまなりければ、たがひに、あさからず、思ひかはして、年月をふるに、思ひの外に、その中みだれて、ありとあるく人、うきもいやしきも、さかぐ、ふはやしに、かゝれまどひぬ。さりがゝき、親はらからも、よもに、たちまれて、たのゞさまゞ、にげさまよふるあひだに、此人、ふれを惜む心、誰ゝもすぐれたりければ、人、ふれず、もろともに、あひ契りけり。我も、人も、いづかゝとなく、うせぬるの

ち、たのづかゝ、その中、きづまりて、又も、あひみる事、ありなんものを、そのほどの、ありさまをば、いうでゝ、たがひに、ふるべきと、問えさするに、女の、とゝぐるも、もちゐるけるの鏡を、ふゝわきりて、たのゝくゝ、そのかゝくゝを、とりて、月の十五日ごとに、市に出して、此鏡のなゝばを、たづねさする、物ゐるゝば、うるゝず、あひみて、たゞひに、其ありさまを、ふるべーと、いひつゝ、いとといたう、うちなきて、別れさりぬ。其のちこれ夫、こひーさ、わりなくたぼえて、いたづゝに、月日をすぐしまゝにいいう

ある人は、心をうつして、契りしことを、わすれぬらんと、むねのくるしさ、たとへがたくぞ、おぼえける。

まそかがみ見れてちぎりしそのかたちかげいづちうつりはてしかやうに、思ひやりけるまも、色、姿のなまめかしくばるやうるるやうに、めでゝ給いけん。時の親王まて、たはしげる人に、かざりなく、思ひかしづかれて、年月をふるに、ありしよりは、いとゝ、へくもちきありさまなれど、此かがみ、みかゝくをいちに、出しつゝ、昔の契

りをのゝ心をかけて、よのつねは、まもるもえまて、のみずぐしけるに、かがみのわれもたる人をし、尋ねあひてをとこ女、ありさまだがひよ、おぼつゝふかゝず、おりかはしつ。女、これをきゝけるよわ、おぼえず、なやましきゝちうちそいてうつし心なくぬ、けしきをみとゞめて親王あやしみとい給ふを、さすがにおぼえて、おぼしいひまぎらはしけれど、おいて、のたまはすれば、そばしあゝ、ありけまゝに、向えさせつ。親王、これをきゝ給ふに、涙袖をおぼしあへず、あはれよいみ

じくだぼさんけるうやゝそほひいうめしきさ
まにていだしたてゝ、昔のをとこのもとへだく
りつうけしたるに、徳言、かぎりなくうれしきに
つけてもまづ涙ぞさきだちける。

契りたきしこころにくまやふうけんふさた
びすめる中川の水ゐやしかゝぬありさまをふ
りすてゝ、昔の契りを忘れどけけん、人ぢもと、親
王の御ものさけハ、なほたづいなくこそ、だぼあれ。
むかし、秦穆公のむすめに、弄玉とゆふ人ありけ
り。秋の月はさやけくくまなきに、心をすまして、

まうすたいふの敬語なるべし。下に尊すべき敬語あり。されど、こゝまも敬語を用ひて、たゞいふとよめり。

まさく世のことにほだされず、又簫史といふ楽
人あり。秋の月きよくすゞしきあけぼのに簫
をふく聲あはれに、悲しきこと、限りなし。弄玉、そ
れをや、心をうつしけん。すゝみてあい給いけ
り。よの人あさましき事に、たゞいそぎけれど、
いうにと、苦しとおぼえず。たゞもろともにうて
あのうへにて、簫をふき、月をのゝぶぶめ給ふ事、
ふと心あり。ほうらうといふ鳥、とび来てなんこ
れをきいけり。月、やうやく、西にかたぶきて、山ぎ
は、近くなるほどに、心や、いそぎよかりけん。この

鳥、巽史、弄玉、ふたりの人をぐして、とびさかぬ。

たゞいなく月に心をすまして、雲にいりにし人もありけり。むなしき空にたちのぼるばかり心のすみけんも、ためし、すくなくこそ。又、巽の聲にめでゝ、人のあざけりを、忘れ給いけんも、すける心のほど、だに、はるかにて、いとゝいみじ。むかしをこと女、あいすみけり。身をどもさかりにて、よろづ、行末の事まで、浅からず契りつゝ、あるにこの夫だに、ひのほうに、はうるくちかりけり。其後、涙ぞ、つゝみてあるもあるすがぼ

えけるを、我も、れも、と、ねむごろにいどみいる人、ありけれど、こうもも、ゆるさざりけり。これを、きくにつけても、おきかげをのゝ、心にかけつゝ、時のまも、忘るゝひまもなくて、つひに、命をうしなひてけり。其かばねハ、石にありてけり。

ことゝりや契りしことのかゝけれバつひにハ石にふりうるかな。此石をバ、其里の人く望夫石とぞ、いひける。ひとすぢに思ひとりけん心の、ありがゝさも、このよみ人にハ、劣りけり。むかし、巽とゆう帝、だに、まけり。沛政ちゝは

じめてよろづめでたき御代のためしよハ、まづ、此御事をのゝしるそかすめし。娥皇女英と、聞え給ふ、二人の后、さゝ〳〵ひ給ひけり。御心ざしいづれ、まさり給へりと、げぢめみえず。たゞ紅紫などの様よ、あさか〳〵ぬ御事まてをん、侍りける。かくて、多くの年月ををんたもゝせ給ひけれどこのせハ、限りある所なれバ、帝、湘浦といふ所まて、はうるくゝるゝせ給ひぬ。其後、二人の后、紅の涙をおゞし給ひて、ふるきをたぐぼせりけれバ、まがきのくれ竹も御涙にそまりて、まだらにぞなりにけり。

君こゝろ〳〵ろのいろの深きあさハ行きもまだらにそむとうそきけ、昔の人ハ思ひそめつることゝ、浅かるぬるもの。

むかし、陵園といふ、宮のうちに、とぢこめられたる人、ありけり。玉のはだへ、花のかゝちあざやうて、世にをゝいなくうつくしかりけり。どゝ、おかうりける時、女御よいつきかしづきて内にまゐりける。にゝうとき楊貴妃李夫人のためしまもまさりなんと思へりけるを、あまゝの御かゝぐゝ、めざましきことにをんなぐぼけ

る。その御いきどほりうやさまぐのなきことにより、陵園といふ、ふうき山宮に、とぢこめられて、あくるめもなき、拙思ひよ、やつれつゝ、みめかゝちもあり、しもあらず、ありしけり。父母いきるゝ、別れめる事を、なげきかぶしめどもあいくる事、おうけり。よのつねゝ、涼き宮のうちに、心をごくて、況のかたと、むしのねよつけても、たもひ、ふを事をしかくしつゝ、やうゝ、琴をもふりゆけハ、四方の山べよ、霞たゝふびき、野べのさわらびあしたの雨よ、かえいでゝ、ちらげるも、

わゞ分のためよハ、うゝやまゝくたぼえて、花の匂ひ、かをりわたるも、ひとりねの、床のうへ、心ときめきせられつゝ、あはれをそへたゝ、たぼろ月夜のゝ、さしいれども、ふにたとるき、かげばゝうり、ほのかなて、あのしすに、春すぎ、なたけて、くれゝ、ゆもめぐりきにけり。さまぐゝ、さきみだれる、ゝ菊花ゆゝべの露よ、ぬれたるを、ゝるも、むかしの重陽ゝ宴と、いひし事、思ひ出られて、なる涙ぶとゞ、たゝくゝ、うたかりけり。

みるたびよ、ふみゞつゆけき、ゝ菊花も

むかしやこひしかるべむこの人山宮にとぢこめられてのち三代のみうどうぞあひたてまつりけり。

（十五）

むかし漢武帝李夫人ばうるく、あり給ひてのち思ひなげうせ給ふ事、とし月をふれども、文にをこたり給はず。そのかたち、やまひせし時、みゆきし給ひしうどもいうるもみえたてまつりざりけり。帝あやしとおぼしてこのよしをとはせ給ふに、ゐれ君にゐれつうまつりしほど、ゐたり佛けしきにたがひなりざりき。又佛心ざし浅からねば、恨みをのこす事もふ。さうれども、やまひるさ三つ、かたちはりて後、みこゝろにそむく罪あるべけれども、又たもつ所おきにあらず。紫の草はゆうりまでめぐみ給ひあはれみをかうぶる事は、君の佛心ざしのあらたまらざるほどなり。さうるを今はかうちにむうしの佛心かはりるば、はうるきあとゝも、うれへの涙色まさらむ事を思ふにたとへたる姿いと、みえまうしくうりるく、おぼさる。たとひ荼毘の煙と、たち

のぼるともいかでそのゆゑをなつかしと思ほざらん。たゞこの世にて今一たびあひみるべきことを、さいて、のたまはすれども、つひにきゝでばうふくるかにければ、みうど御心にうらみふうし。甘泉殿のうちにむかしの姿をうつして、朝夕に、まもり給ひけれど、物いひ、ものむ事ふければいたづらよ、御心のみつうれまけり。

ものゝかけら姿ばかりのかをきいとゝへどこたへぬあげきたなかけり又ふき人のたまひをかへす香をたきてよもすがら、待せ給ふよこ

このへに、錦の帳のうちかすうきて、寝たるとも火は新ほのうるに、やくさらふけゆくほど、あくし、すさまじく、夜さづうるに、反魂香の、さらしあるゝやと、おぼえ給ひけれど、李夫人のかゝらあるゝもあらずあきもあらず。ゆめまぼろしの如くまぐひて、つうれまに、きえうせぬ。まつこと、ひさしけれどかへることハ、ぬばたまの、かみすぢきるほどばかりなり。ともに夫をそむけ、帳をへだて、物いらたふる事、ふけれハ中く、御心をくだく、つまとそ、ふりにける。

むかし、唐の玄宗とゆすみかどの御時、世の中めでたくをさまりて、ふくゐも、物をふくまず。よる雨も、時をたがへざりければ、みふ人、天下、たぐひきふ、ほこりて、花を翫み、月をもてあそぶより外の、いとなきふ、みかども、色にめで、香にのみふけり給へる、御心のひまふさまや、よろづをば、楊國忠とゆゆる、人ゐまうせて、やうやく、みづかるの御まつりごと、をこたらせ給ひよけり。これよりさきに、元献皇后、武淑妃などきこえ給ひし后、世にすぐれふく、たはすまき。

それはうるはしく、なまめかせ給ひて、後宮、あまたの御中に、御心にかなひたる人、たはせざりきこえしより、高力士に、たばせられて、みやこれほうまで、尋ねもとめさせ給ふに、楊家の娘を、え給ひてけり。其かたち、世の月花、山のはなり、うるはしくのぼる、こゝちして、その、いきざまは、夏の池ふくれあがれはちす、はじめて、ひらけたるやうにゆゑ、ひとたび見めば、もゝの媚をりて、人の心、まどひぬべし。すべて、世世の人ゐは、あるべうず。たゞ、天人などの、まばしく、天降りるとぞ、みえける。かゝりければ、うへ、内

裏のうちに、たちまちに、いでゆをほゝせて、この
人よ、あむさせ給へ。湯より出るゝ、すがゝ、まこと
に心ぐゝしく、うす物の衣、なほおもげなるを、
えける。いろざし、あゆみいで給へる、けしきかる
びたるものかゝ、けだかく、あいゝしくて、さす
がに、思ふ所あるさまにぞ、ふるまひ給へり。うへ、こ
れを、見給ふたびよ、うれしく、よろこばしく、たぼ
さゝ事、たぐひなし。たゞ、みめかたちの人まさ
れしわざありさまは、世にゝるびなきのみに
あらず。よろづにつきて、くゝかゝずゝ。ことにふれ

て、ふさけふるくるなん、ものゝ給ひける。又、うへは、
御心のうちに、たぼさゝ、ことをばさあらぬ、そ
らに、ふりて、ふるまひ給ひければ、かぐりなき御
心ざしをも、よの人、とわりと思へり。たゞ、車、
ひとつゆうにあゝねば、みゆきゝいね給ふこと
ふし。三千人の女御、后、我も、我もと、さぶらひ給へ
ど、御めのつてよだよ、かけ給はぬ。たゞ、此人をの
みぞ、月日にそへて、たぐひなきものに、たぼさけ
る。又、驪山宮に、行幸し給ひて、霓裳羽衣のまい
をゝそうせさせ給ふ。まひの袖、風よ、かへるたびに、

玉のかざり、庭にたちつもりて、極楽世界とかり
の池も、かくやあらんと、たぶとそうり。おほうそ、謙
心宮の、秋のゆふべに、心をとめぬ人なし。春は
るのあけぼの、夏は、夜は、よのみじかきをぞ、
なげき給ひける。かくて、よもすがら、日ぐらしに、
時をわかずぞ。されども、ほうの、清いとなみ、ふうり
ければ、國のまつりごとのすみにぐるをも、さ
とり給はざりけり。すべてこの楊貴妃は、ばく
みにうりて、世のくるしき事をもすれつゝ、ほこ
り、をごる人、その數をしらず。又、天下の人、をき

も、いやしきも、心にたうはずと、思へるけしき、ふ
べてあらず。みる人、きく人、うらやみ、めでるさま、
いひつくすべからず。されども、をんなごを、
うめるものは、はづかしづきてかくるたぐひを、
心をかけくるも、をこがましくこそ。又、帝の清お
とうとふ、寧王とかすの清かさはをはるしず。
まぢらく、ゆうををるべて、よるひるを、わうぬ、清お
あそびるも、かぎりなくず、さぶらひ給ひけり。此親王
の、玉の笛を、帳のうちにかくし、たうせ給へりけ
るを、楊貴妃、とりて、何とをく、ふきなら給ふ。帝、

これを、沛覺じつけて、たまの笛ハ、めしにあるず
してハ、ふくことなし。きつるを心ざしのたもき
に、ほらりて、礼をあやまてり。事れみだれまハ、あ
らずやと、ことのほうに沛けしきかなりまけり。
これまうりて、楊貴妃、いろみたぼす心や、ふく
りけん。髪れうみ、一ふさをきりて、帝にまり給ふ。
我身れはぶへかりられ髪なでハ、皆これ君の
沛物まあるずや。きつるを、ろし、今沛心にそむき
ぬれば、罪まふしてをこたりをすべしとふく
なくゆえさせ給ふに沛使もいとはしたなきま

で、だぼえつ、このうを、奏するに、沛心もある
て、地と、だぼえさせ給はずなるる、時のまにめし
かへして、世に程、たぐいなくもある心うなとれ
ほしつづくるに、沛心ざしのふうさ、日ごろまハ、
すきにけり。ぱつれの七日れ夕、驪山宮に、ゆき、
し給ひて、たあぼさ、ひこぼしのたえぬ契りをう
らやみて、ぱうあきこの世れ、別れやすき事をそ、
かねて、なげき給ひける。かくちハ、六のみちに、か
ぱるとも、あひうんことはたゆる時あるべと、契
ら世給ひて、

すがゝうそはうあき哭、にかはるとも紫
りハくちぬ物とうそきけ、なゞのたまいつゝ、沛
まをとりかはして、涙をなゞし給ひけるを、すべ
て、世にきくくさへ、袖のうへつゆけしかくて、年
月をたくせ給ふに、右大臣楊國忠、楊貴妃のせ
うとうて、世の政をとりけれど、人の心に、そむ
くこと、多くつもりにけれバ、世の中、いきどほり、
ふくなりぬ。其中に、楊貴妃やーなひ子に、た
大臣安祿山と、同ゆるくいきほひをあらそひて、
心の中、いきどほり深けれども、これをあやむる

人、さゝふあり。これよりて、たちまちに、つとも
の十五万人、あつめて、つひに、楊國忠をほろぼす
に、世のあゝみだれてさゝぎのゝ土りあへり。も
、しきけうちまでも、そのおそれ、深けれバ、みう
ど、外へまげさせ給ふ。東宮、楊貴妃沛かさはらに、
さゞい給ふ。楊國忠、高力士、陳玄礼、韋見素、又ま
ともに侍りがくて、蜀とゝ國へ土りぞうせ給
ふよ、いうなゝん、野の末、山の中なりとも、四人と
だよ、ふりあゝバいけらんかぎり、思ふ事あ
ゞと、たぼさゝに、人のけしきかなりて、兵ども、

道をゆうず。此時、うへ、思はずにたぼして、ゆゑを
とせ給ふに、陳玄礼といふ人、東宮にかしていい
はく、こゝろやく、楊國忠まつりごとをみだり、人の心
をやぶる故に、君も、けふ、此事にあはせ給へり。君
の御かゝきよのあさに、あゝずや。さうのじ。たゞ楊
國忠をうしなひて、人のうれへを、やすめんまい
と、聞えさす。東宮、これを、ゆゑ給ふにより、楊國
忠、めしまへに、はうるくなりぬ。帝、あきまくは
うなく、たぼされるぶり、此後ゆうんとし給ふに、
つはものども、たちまはりついみだれの根、怪あ

かゝるほどのあとさだに、脱文あるべし。こゝろまことえがゝにこゝちす。

りとやして心ようかゝぬけしき、ありけり。此時に、
うへ、楊貴妃の、まぬかるまゞきことを、さとりた
まひぬれば、御顔に、袖をおほいて、ともかくも、聞
えさすることふし。かゝるほどよ、この世に、楊貴
妃、いうふんいとほの中なりともたぼつうま
かゝぬ御すまひなるべば、いとくるしかず、たぼ
けるに、思ひの外に、命たえぬべきこゝやと、あさ
かゝぬ別の涙、ちまほの紅よりも、怪いろ深くて、
せんかゝふく、みえ給ひあゞ、ふほゝ、帝に、ぬ
をかけまり給ひて、かくれさせ給ふまで、かゝり

みたまへる御ありさま、何ゝたとへべくともみえず。あでゝこの、つゆにぬれたるうりも、らうたく、あをやぎの、風ゝまつたづへるよりも、なよゝかに、大液の芙蓉未央の柳ゝかゝひ給へるをしも、あさけなく、道の邊野でゝの中ゝて、ねりたるきぬを、ほくびゝ、ひきまとひつゝ、ついゝ、はうふくまゝ、ありつゝ。物のあはれをしらぬ、草木までも、いろかはり、なさけあき、鳥獸さへなるゝをあうせり。

ものごとにうはゝぬいろぞふうりけるみどりのそゝもよもの梢も、御ともにさゝふくゝ心あるも、心あきも、たけきも、たけかゝぬも、みな、涙にぬれて、行かくもしらず。又、帝は御心のうちゝは、

御ぜんに出のうてゝあをがきけん野べこそつひのやとりなりけれ、たゞ御袖のゝうへの涙ぞ、あうれけり。御心まどひはやうまのうへも、あやふくみえさせ給へば、人ゝ、うらうへに、そひなりて、やうゝゝゆうせ給へに、兵どもかてつきかつうれて、帝にしらるがひなゝん事、二心なき

にあるねば、陳玄礼も、とぐ出べきこゝちせず。かゝるほどゝ、益州といふ國より、貢物、數きゝず、はこべりけるを、御前につみたうせて、さゞめく人ゝに、わうらたまはせて、のたまはく、我まつりごとの、すみにごれるを、きゝざりしより、けふこのみだれをあへり。わう命、ひとつにすりて、さりがたき、おやはらからをも、ゝくれ、二つなき命をもすてゝ、我に、きゝがてり。ゝれ又、石水をゝねば、あはれむ心ふかし。はやくこの物をたまゝりておのゝ、故郷へかへりねと、のたまはする、御油の上、水の草葉よりも、つゆけくみゆ。この御ことを、うけたまはるもの、みな、涙をたさへてゆしてい はく、命をはゝんまでいたゞく、君にきさがいまるべし。かくて、日も、ゆふぐれよ、あるほどゝ、御かゝはゝ、さびしきにつけても、いふまゝ、中あのたびの空に、いとわや、やみまよふゝん。などゝ、たぼみだれたる、こゝろぐるさ、あはれよかるべし。いつも、おろうふり。夜も、やうゝ、あけがたになりぬれば、又、出ゆうせ給ふに、在明の月、西にうぶくほど、をゝ居はるかよ、あきゝゝる厨がねをき

かせ給ふまも、沛心のうち、かきくらされて、何方へゆくとも、おぼされず。蜀山とこの山、はげしく、さかしくて、とだえがちなる、雲のかけはし、あゆみわづらせ給ふ、沛けしき、ゆそにたふ、あほ思びかぐ〳〵。百のつうさ人、数たとろへ、いきほひいうめしかりしはさるどさへ、雨にぬれ、つゆまを志をれて、その物ともみえず。沛ともにさぶらふ人〻、何事につけても物心ぼそくたぼえて、島のこゑもせぬ〻山まかりの宮、いとあやしきさまなり。月のかげぞりほうに、光なきさうちのみして、あるまもあるず。あさましきほどなれど、所まつけたる、沛すまひハ、やうかはりて、かゝらぬをりふらバ、たかしくも、ありぬべし。これまつけても、九重の、すきれ帳の内ハ、玉の床のうへまを、枕をふらべ、衣をへだてざりしむかしハ、我何事を思ひけんなど、たぼそれけるも、まことに、ことゆりふり。かゝるほどまを、東宮ハ、ゆづりをうけて、位まつうせ給ひぬ。あしき心あるものを、うしふひ世の中を志づめて、太上天皇をむうへとりまゝせ給ふ。ぞかく、内裏をるべて、よろづを、ト合せつ

つ、沛改あるべしと、同え給へど、この沛物思ひのあまりに、さるべき事ともおぼさしず。世もたひらぎ、沛心もさぶまりて後は、沛ふげきも、日くかたるくひとすぢにもりぬ。時うつり、こと変り、たのしびつき、悲しび兼れる、池の蓮、夏ひ〳〵け、庭れ木葉、秋おつるごとに、沛心のなぐさめがくさ、たぐひなく、たぼされける時は、はうなく別れ〳〵野べよみゆきせさせ給ひけれど、あさぢが原に、露おふきて、夕の露、玉とちるを、沛見ても、きえいりぬべく、たぼされける。

もろともにかさねし袖もくちはてゝいづれの野べにつゆぬ〳〵ふらん、かくのみ、たぼ〳〵つづけて、涙をたさへて、たちかへ〳〵せ給ふ、沛有様のよそ〳〵しさもいはなむ、おろうちるべし。

ふれすて道にほとりに尋ねきてかへさい駒ゆまるせてぞゆく、春の風に、花のひら〳〵ちるあり、秋の雨に、木の葉おつる夕、宮のうちあはれに、さびしくて、いろ〳〵に草の花、庭の面に、さきみだれたり。又紅葉の錦、階のうへ、くれなゐふうくみゆ。むかし、楊貴妃のまぢかくつうひ給ひし、

女房など、月くまなき夜は、むしろをうめる、涙に
むせびつゝ、ことをたゝべ、びをひきけるまも、
いとゞ、袖の上ひまなくみゆる、心ぐるしさよ
その狭までも、せきかぬるこゝちす。忘れてもま
どろませ給ふ時、あるしば、夢のうちも、あひみ
給ふ事は、ありがたし。夜のきりぐすも、まくらにす
だく、聲まも、涙まさり、ゆれ螢のみぎはをも
たる、思ひも、きえいりぬべく、たゞぼうれけり。か
べをそむける、ゆりのともび、光かすかにて、明
久もろともに、たきふし、ゆひ、とこのうへも、塵

つもりつゝ、ふるき枕、ふるまゝむすゝくて、
涙がちにはゝにあれども、誰と共にか、涙にふれ
させ給ふべきかくて、二年ばかりもたちぬれ
ば、まぼろしといふ仙人、まゐりて、我君の御心に、
楊貴妃をたぼせることの、かぎりなきそこを、
ひ、の道、おぼつかなふ、ねがはくば、生
れ給ひつゝん、所をたづねて、かへりまゐん
と、聞えさすれば、うれしくたぼさるゝ事、限りな
くて、御物思ひたちまちにをこたりぬ。まぼろし、
空にのぼり、地にいりて、いづくにぬ所なく、もとむ

るに、その雲にのりつゝ、扶桑ざまに、とびゆくに、わさつみの中にいとたうき山あり。そのうへに、珠の臺、こがねの殿ども、軒をならべ、いらかをつゝねたる、ようそほひありさま、すべて、此世のたぐひまあしずず。又そのうちに、仙女、あまたあそびたはぶる。此所に、ゆきむかひて、玉の戸ざしをうちたゝくに、いとひさしゝず、此世なるぬし出て、まぼろしにあへり。楊貴妃の、うまれたまへる蓬萊宮、これなりと、つをきくに、うれしさかぎりなくて、唐の玄宗の使なりと、聞えさす。楊貴

妃、たゞ今、いね給へり。あゝ、たをやめ、まつべしといひて、ゆりいりぬる後、心もとなくて、ひとりたてり。夕のあゝ、たとなくて、波の上、はるかに入ぬるさすほど、をりかゝるや、あはれに心ぼそし。かくて、夜も、やうゝ、なうばすぐるほどに、花のとぼそに、白露ひまなく、おけるをみて、

あけやらぬ花のとぼそのつゆけさにあやなく袖のぬれぬるかな

けゝるほどよ、夜もあけ、日も出ぬれば、楊貴妃、いで給へり。こがねのかむざゝ、ひうあぎやうに、たまのかざり、あもう

がやくほどなりまぼろしに、あひむかひて、さば
しハ、ことに出給はず。まづ、袖なるなみだをぞ、おせ
げにたぼせる。方士も、袖のあひまなくて、久しく
なるほどふ、楊貴妃のたまはく、天寶十四年より、
このかた、けふにいたるまで、帝の御心れうちを、
思ひやるに、おやましく、くるしき事、かぎりなし。
かばかり、たへなる面に、生れうれど、髪りの涙き
にぬりて、我、うき名をとゞめし、故郷のうぞ、心に
かゝれる。朝夕なれし里を、みわろせど、いとゞつゝみ、
雲きりのゝへだてみる晴間なし。などゝ、さまぐに、

のたまはするありさまゝ、かほ、霓裳羽衣のまひこ
ぞ、ゆたまへる。方士、みかどの御心れうちを、おれ
りければ、ありのまゝに、聞えさせつ。たゞひゝ、心
のいぶせきをはるけて、方士、かへりまんとする
に、楊貴妃、こがねのかんざしを、をりつゝ、さゞ物
として、帝にまれとのたまはす。方士、これをとりて、
こと浅くも、思ひけん。こがねのかんざしハ、若れ
中にたゞひなきものゝもあゝず。そのかみ、さぶ
めて、人まれぬ髪りありけん物を、ねゞはくバ、
うけ給はりて、奏せ〜めんと、つゝに、楊貴妃、け〜

きかせり、涙まさりて、たぼ〜みだる〜事、ありとみゆ。昔、天寶十年の秋、七月七日、驪山の宮に侍り一時、織女、彗星のあひみる夕、長生殿のうちだとふくて、ふのけ〜き、ものあはれまさりしに、みかど、われはたちそひてのたまはく、天にあ〜ば、はねをかさす、鳥とあり、地にあ〜ば、枝をかはせ、又とあ〜んと、られ、君よりほうよ、又さるへなし。此契りのかぎりなきにより、てかあ〜ず、下界にうまれて、さぶめて、二度あひみて、むつまじきこと、ふるきごとくあ〜ん。我、この事をかねて、おもひへだたる心の悲しく云ふの、一段、うとぶつづき、稍々ふらす。伝写のあやまりなるべしらぬこの。

り。思へば、おうもかなるべく、思へば、又うれしかるべし。なほ、聞えさせ給ふ、帝ありさまも、思ひぶたき、帝心のうち、あ〜はれて、馬嵬の道は遠よ、いまは限りと、みえ給へり。夕のうみも、形唯今のやうに、たぼせるけしきまことに、梨花一枝春雨をたびたり。

いうきす玉のかほをせおほれて形そのかられこちこそもれ、方士、へり来りて、此ゆうを、奏せ〜むるに、帝心、日をへてかやうまり給ひつ、生れたまはんほどをも、おほ心もと

みづうゝれて
よ、も文字、お
ちゝろゝーも、
あらぬゝさゝ
でハ、うゝぞつ
ゞき、穏ゝなゝ
ず。

なくや、たぼゝけんそのとゝれ夜四月に、ゆづか
ら、はうるくゝるゝせ給ひみけり。

きゝゞりゝたまのありかをきゝえてそよ
はのけゞりと君もなりにゝこれひとり、君のみ
にあゝず。人とうまれて、石木なゝねバ、みふたの
づゝゝ、ちさけありゝいまゝへより、今にいゝゝうま
でゝうきもいやゝきも、かゝこきも、はうなきも、世
道にゝゞぬ人ハあゝゝ。ゝりとゝいりぬれバ、まよ
はずとゝふことなゝ。きゝゞ。たゞ心をうごかす、
色にあはゞゝんゝハ、ほうそだのゝみをかえ

も、うきも、つゝきも、世世ハ、みちゆめまぼろゝし
如ゝ。ハの苦、のがゝゝ事なけれバ、いとひても、い
とふべゝ。天上ゝたのゝみ、限りふけれども、五の
たとゝへ、さとる事ふけれバ、ねがゝつべきもた
らず。うまれても、ゝゝあゝ。きかゞ。たゞ心を一に
して、三界をいとひて、九品をねがゝふべゝ。極楽を
ねがふとも、世世に、きゝふをとゞめバ、ともづなを
とかずゝして、船をいださんゞごとゝ。世世をいと
ふとも、極楽をねがゝはずバ、ちゞえをそむけて、東
をはゝら きめんゞ如ゝ。世世をきいとひ、極楽を

もねがはず、苦をあつめたる海をわたりて、楽をきはめゝる國にいゝんことをいうたがふべうらむぞ。ゆめ〳〵、いでがき、悪趣にうへゝぞして、ゆきやすき浄土にいるべし。

むかし、朱買臣、會稽といふ所にをみけり。よにまづしく、わりなくて、せんかゝあうりけれど、文よみ、物をゝふ事、よろひいる、をこたらず。そのひまよハ、たき木をこりて、世をわたる、はうりことを志けりがくて、年月をふるに、あひぐしたりける女、限りなくまづしきすまひを、たへがゝやく、思ひ

けん。我も、人も、あゝぬさまにふりて、世を試みんふど、こまやかに、うちかゝりひければ、かくてもやありはつべき。猶ことばうハ心づよくあひねんぜよと、よろづにらへけれども、つひにきかで、其とゝのうちに、はふれまけりをとこ、こひうふゝめども、いかひなくて、つぎのとしも、ふりにけり。この人は才学、よにすぐれたることを、帝、きゝ給ひて、その國は守になされぬ。はゝめて、國にくだりけるありさま、心ことばもたらばず、めでたかりけり。かゝれども、猶あり

しつまのことを、心にかけて、一國のうちを、尋ね求めさすれども、似たる人なくて、あつしくすに、野にいでゝ、狩してあそびける時、こともなのめならず、あやしくわびしげなる、賤の女の、からみといふ物を、臂にかけて、菜をつみて、ねぎりありくを、ゆゝしげの、物はなれありさまやと、みるほどに、我、昔のつまとみるまでけり。怪しがめるやと、めをとゞめてみるに、いうもたがふ所なうければ、人まれずかるしくたぼえて、くるくやたそきとゞびとりてけり。女、我あやまつこともあき

に、いうるることのあり、あるりるんずゝんと、たそれまどひけれど、ありし昔の事ゞを、こまやかに、かゝひければ、女、あさましくたぼえて、この夫をうちみるより、いうゞたもひけんいたくふやみわづらひて、曉がたに、たえいりぬけり。

もろともに錦をきてぞかへりまし うきにたへぬる心なりせば、心みゞかきハ、何事につけても、くちをしきことにこそ。ゝきをきて、故郷にうつるとハ、この人れ事なり。

むかし、晉の景公といふ人、たはゝけりそのつう

けれ人趙朔、國のまつりごとをどれり。又、屠岸賈
といふ人、あらそふ心やありけん。やいもすれば、
此趙朔を、さりぞけんとたゝふ心、深くて、とがを
もとめ、ふきことを、いひつけてづみにたこるは
るべきうをあるごにいひけれども、もちひら
れざりければ、心中にいきどほりふうくて、あう
しくすゝ、ぢやすめがくやたぼえけん。趙朔
をばゞめとして、兄弟、さゝ、ほろぼ、うしふ
ひてけり。其中にとゝごろ、あひぐしたりける妻
るん、ひとり、この事にまぬうれまけるをりしも、

たゞるゝぬことゝへありて、かくれまどふにつ
けても、わりなく、かなしうりけるを、杵臼、程嬰と
いふ、二人のつうはれ人、あるごをたもつ心、ふう
かりければ、人されぞ、かくしはぐゝみてもし、生
れたるゝん子、をのこ子なるば、たやのかくきをも、
思ひさりなん。たゞいうにもして、ことなく、人と
ふゝんことを、思ひはうれりけるを、かくき、かれ
きゝてめざまくるん、たぼえければ、ぢたづね
求めて、其あとを、ほろぼうーなんと、思へり
けりこれみうりて、此女、かくれまどひふゞゝ、お

意のごとくをのこ子をうみてけり。杵臼、程嬰が
ぎりふくうれしくたもひけるも、わりなくし
て、まづがゝみづゝ、かくし置びつゝ、やゝなへ
りけるほどゝうのうくきの屠岸賈こと事をき
きつけて、あふがちに、あさりもとめけり。母は心
に、せんかゝるくたぼえあぐゝ、きたりけるはう
まのふうに、この子をいれて、をゝへていはく、親
のあゝをつぎて、君ゝもつうへなるべき物なら
ば、物の心をまゝず、いとけなゝといふとも、聲を
たてゝ、ふくことなかれ。もし又、此時にあゝりて、

子孫、なゝくたゆべきものなゝば、はやくなくべ
しと、心のうちに思ひつゝ、ふゝくかくれゐたる
に、本意ごとくたとゝあうりければ、かゝるきもと
めかねて、かゝりぬ。母は心に、うゝらびふゝし。さ
うれども、このうれへにたきてゝ、たゆる時ある
べかゝずと、あげきわびつゝ、程嬰に、杵臼かゝら
ひていはく、此子を、ことなくやゝあひたてゝ、父
のあゝをつゞせんと、命をすてんといづれぞ、か
たうるべき。程嬰こゝへていはく、さるんはやす
しだひらうに、やゝあひたてん事はいと、かたし

といふに、杵旧がいはく、恩のふかき事ハ、君、我よ
まさりき。やすきにつけても、われ、まづまるバ、
そのほかのきことをとげてかゝるべしず、あるをむ
くい給へといひつゝ、をさなき子をひとりいだ
きて、深き山の中にかくれあたり。程嬰、かさきに
つげていはく、我、もとめ給へる子ハ、
有ぬをもたり。ねがはくハ、こがね千両をたびて、
をゝへなんといへるを、かたき、よろこびさわ
ぎてたちまちに、千両をあゝへつ。をさがまゝく
ハ、たぼえあゞゝ、もるべして、世ぬに、ゆきむかへ

さに、杵旧、子をうちいだきて、あきれたるけしき
もて、おたりかゝるき、これをみていはく、ろろさ
んとまるに、杵旧、さけびていはく、なろうるか
な、程嬰、もゝ、れ、れんをわすれて、もろともに、人
とあゝずとふとも、いうでゝ、子ゝのこがねは、
ふけりて、ひとりの子をバ、ころすべき。今、我をう
しなはんことハ、其いはれ、なきにあゝず。いとけ
なき子に、ねきてハ、何のつみゝハ、あるべきぬゞ
はくハいけよとさけびけれど、たちまちに、ふた
りあゞゝ、ころゝつ。そのほ、誠の子をバ、程嬰とり

て、山の中にかくせり。年月をふれども、かゝるき、うたゞの心あけれバ、又、そのわづらひなくて、十五年になりぬゞその後、主人やまひにもづゝひ給ひていと、大事におはしけり。此事をうらなはしめ給ふにつみなくして、罪をかうぶれる人のたくりとうらなひゃーしけり。趙朔をほろぼす事ハまたく、我心よりたらゝずたゞ、屠岸賈みづからの、いさゞほりにより、て、世をあきに出るして、ふるまへるゆゑに、我今、このやまひをうけたり。天の下にあらゞとして、あるまゞきことを、するもの

を、出りゞけぬハ、もはら、わゞとゞがあり。出うれバ、いうあることをして、このやまひをやむべきとのたまふに、韓厥といふ人、うろづに、ゝしき事、ふうりけれバ、はゝうひゃーていはく、趙朔ゞのちをつうはせ給ふべし。十五になる子、ひとりたひらうして侍り。事のありさまをバ、こまかゝ、出らせ給はずやと、ゃーしけり。あさまーとたぼして、たちまちに、めーとりてみ給ふに、昔、はうるくふりーたやに、つゆばうりもたゞはずにたりけるをあはれ、いみゞくたぼして、つーゝ、父のあ

とをつゞせ、つかさ〳〵ゐ、分にあまるほどよ、ふりてのほ、ゑ、ゑのごとく、たやのかゞきを、ほろぼしうゝゐひつゞくるべきことゐゑ、ありけん。何事よつけても世にもちひられ、人ゐはぢられて、世ちゐも、なりぬれば、程嬰、心やすくたぼえけり。くて後、このあゝだに、いとまをこひて、いはく、我は、はやく、志に侍りゐんとゝふ時に、あゝだ、物おぼえず、心あらてゝ、こゝいゝゐとゝふに程嬰ゞゝはく、我むかし、杵臼にちかひきゃやきゐつけて、まづ志なゞゝられゝ、恩のふゝきにゝりて、かゞき事をとゞげてかゝらず、むくゆべゝとやゝきぷゝゐを、我今、志なずば、杵臼に、そゝだのめするにあらずやかゝこき人ゝ、いひつる事を、たゞへずとばゝいひて、つひよ、我分をゝゝらゝつ。此時にあるゞ、あやゐくたぼゝて、かゝる事をみゐゞら、世にあゝんことゝ、はぢゐりと、たぼえけれど、むゐゝく、ちゝのあゝとをたゝんことゝ、ほいちゐうらず、たぼえければ、命をゞすてずゝて、ふぢの衣をぞ、三ゝせまで、ぬゞざゝけるゐ。ふげきかゐゝむ事、年月をふれども、さゝに、をこたゝざりけり。

思ひたる心いたれもあうけれどかるた
めしいまさもあうどふ、此つうはれ人二人ゐ後
の事より外のいとなるみふうりけるも、誠にこと
もりふり。あるじの名をバ、趙武とぞいひける。
むかし、平原君と同ゆる人、三千人のつうはれ人
をあつめて、これをあはれみ、ねんごろに思ひけ
るに、このあるじ、たもひづま、高き楼のうへに
ありて、ふもをみるに、はけるに、あーるへたるもの
は、はるく、おぞりつゝ、水をくみにゆきけり。左
右の膝よりもかしら、狂ひきいりて、人のすがた

にも似ずようにをうーげるうけれバ、此をんな、思
ひもくかるもなくて、うちわひてけり。此かた
をんなわるふうをきて、我がるやまいにわ
づらひて、とし月、くるふりぬ。今はじめて、人の
わひ、あぞけるべきにあーずこれ、ひとへに、君
の色をこのみて、つうはれ人をかろーめ給ふゆ
ゑふり。もし、我をすてぬ情心なるバ、わひつる
人をうーるひ給ふべしーと、ひてあるじにうれ
ふるに、なのれぶいきどほりをやむべーとハい
ひふぶ、さすがに、あるべくもなきことあれバ、

その後月日をふるに、三千人のつうはれ人、やう
やう、数すくなくなりゆくを、我いきいかも、あや
まつことなしとおもうれども、うらみをいだきて、の
がれさる心さしりがること、わのくにびひくぞ
けり。このあうに、ことに、つまびらかなるものゃ
していはく、君、このかさはんを、すかし給へり。こ
れ、我らが身のうへに、あしずゃ。もし、かくのごと
くなるば、何をたのもしとおもひてう、身をすて、
心をはげまして、君につうへまるべきといてう。
あるじ、これをきいて、浅からぬ、とごろみむつ

まじきをもかへりみず、四女をたちまちにうろ
してけりかくはんこれをみて、心ゆきぬ。又、その
外ぬつうはれ人どもも、もとのごとくかへりにけ
り。

思ひきやたづうろ為みしことのはの末で
の山路にちらんものとは、あしあへたるつうは
れ人ひとりに、かほうつくきんを、かへけるも、
いと、おろけなき、さるぞあり。ゃ。たほうこれの
みちずかる國ゃ。ひとて、あやしきものふ
れども、いひたらぬることを、帝もその心ざしを

ば、やがてせ給はぬるぞ。

むかし、楚荘王とゆすぐ人、群臣をあつめて、ゆるすがゝ、あそび給ひけり。その沛かさはゝに、あそからず、思ひ聞えさせ給ひつる后、そぶゝひ給ふを、人きゝれず、いうでうと思ひまる、臣下ありけり。ともゝ火の風にきえたりける、ひまに、后の沛油をとりて、ひきゝりけるを、かぎりなくいきどほりふうくゝやぶぼゝけん。沛をきゝやりてこのをとこの、かうぶりのえいを、とりて、かゝることゝふん侍るぞはやく、火をともして、えいをかゝんを、

それとゝきてせ給へと、ゆゝ、給ふをあるじ、もとより、人をあはれみ、ふかけふくゝ、たはゝければ、ともゝ火、消たるほどよ、これに侍る人ゝ、たのくゝ、えいをとりて、まるべゝ、その後、火ともすべゝと、のたまはするに、涙をとゝ、涙もこぼれてうれしくゝおぼえけりゝ。かくて、ともゝ火、あきゝらふれどたれもみふ、えいをうければ、その人と、みえざりけりゝ。かゝれば、此人いうるるぞゝしてう、君のふかけをむくいまゝんと、心のうちに、たゝへりけるに、あるじ、かゝきの國に、せめゝして、あゝ

ふきほどに、たはゝけるを、此人、いとゝ、効をすて
て、戦いければ、あるじ、かゝせ給ひるけり。此こと
を、思はずに、あやしくたぼゝて、そのゆゑを、尋ね
とはせ給ふに、此人、かしていはく、これ昔、后に、え
いをとゝれまりて、思ひやるかさるく、侍りしに、
誰とるくまぎゝは給ひしこと、我今にわすれ
侍ずと、ふくくやしけり。

ふさけるきことのはなゝが今までにつゆ
のいのちれか、らまやか、あるじ、これをきう
せ給ふまも、ふほくとしてふさけあるべきこと

にこそと、たぼゝけり。
むかし、後漢のよに、荀爽といふ人、ありけり。心う
しこく、かほうつくゝきき、むすめをぞ、もちたりけ
る。みめ、こゝろ、たぐひなきのみまあらず、才学、
ふゝびなくて、せぬもぞふうりけり。これを、父母
も、いつきかしづく事、かぎりなし。かりければ、
たうき、いやしきさあるゝ、心をかけて、ねんごろ
に、いどみいはせけるたうに、隠瑜と聞ゆる人、心
よ、たれることやありけん。此娘に、あはせてけり。
をとこ、心ざゝふうくて、又ふきものに、思ひける

も、まことに、ことゝろふくみえけり。みとせば
うりに、ふりゆければ、月日のすぐるまゝに、い
とゞ、たゞひゐくのみ、たぼえてさまゞに、浅う
らず、繁りおきける事ども、あまたゝびゆきぬ。
かゝるほどゝ、此をとこ、病にもづひて後、いく
ほどふくて、つひゐ、はうふくきりぬ。女はけゝき、
あるゐもあゝず。かゝるゝびのあまりゐも、命もた
えぬとぞ、みえける。ようそにみる人さへ、いと、は
たふきほどゝ、たぼえけり。月日はあゝたまれど
も、別れの涙は、かゝらくはず、ふうけり。父母いうに

して、うゝ、ゝ、くゝの、たねをだゝ、とりてしがふ
と、思へど、さゝふかゝのゝべくも、みえず。此はは、た
ふゞ里にすみける、郭奕といふ人、ゝにとりて、い
やゝかゝずはゝもゝひられたり。此をとこ、思ひ
の外に、年ごろすみゐうける妻、はうふくきり
て、ふげきやうゝをこうたるほどに、此女をあは
れいうでうと思ふに、たへぬけゝきいろにいで
ぬこゝろゝして、父母、ゝづひゐくゆゝしてけ
り。此女、かゝゝと思ひて、さまゞに、あゝまゞきよ
しをねんごろにいひけれど、たやの心に、さが

はぬハ、限りなき罪とハ、さゝ〳〵やゝみづか〳〵の心まゝそ、ふさはし〳〵ずハ、男子とも、いうでゝ、たやのほいをバ、たゞあべきなど、狂いひけるに、昔のをとこようもいけるたやの事ハ、なろかるたぼゆる、ことゝもりに、まげて、ふまゞいに、いでたちつゝ、今のをとこのもとへ、ゆく〳〵も、袖の涙かをくまも、ふゝりけり。かゝりけれども、男の家、近くありゝけれバ、色、かゝくちをあらためて、よろこびたるけしきにて、なりぬ。車よりたりつゝ、ふゝ〳〵かゝ、あゆみいりて、帳の前に、火、さゝろくかきたてゝ、うちゐたるこゝとがゝ、けしきをみるに、うれしくたぼゆる事、限りなし。又、物などみたるゝ、うちいひけるこゝとのはゝつけても、はづかしく、つゝましくのゝ、ねぼえて、たちまちに、まぢかくよるべき心地もせず。たくせられて、やゝ、久しくなるぼどに、かねもなり、やゝ急れ馬のおゝ〳〵ふきわゝうぬれバ、此女、何となく、すべき事、ありがほよ、もてふゝて、分ちゝき女房、ひとりふたりをぐして、はゝのつまゞれうちにいりぬ。かくて後、いたくうちふきて、女房にがゝりていはく、我、昔の髪りを思

ふる、はのまも、たゝ志のぶべき、心地せず。さりか
がゝ、親ゝをもける、罪をたゞして、おまゝ、いよ、こ
こまでハ、来たれど、いきあゝ、ふたりの人に、契
りをむすぶべき、ことゝりあけれバ、今ハかぎり
の、我ゝとハ、志ゝずやとて、
　たゝやまゝそゝもむすぶ道にいりぬるもふう
き契りをいうぶゝもゝれん、いきてハひとつ家の
まゝ、はりたゆることゝなくゝ志るなバ、又、おまゝつう
の塵ゝも、ふりるんと、ちかひしことゝハ、中者のた
びの空ゝも、たゝもゝ、忘れめやとい

ひはつれバ、らうたきまゝ、ゝりよりくれふゝみれ
涙、ふゝれ出るけしき、まことゝ、にほひことゝなる、
やへ紅梅の、春ゝ朝の、雨に志をれて、ゝそほひさ
びしきに、かゝひたり。かくて、志ばゝ、ばゝうある
に、ゝのありさまゝを、思ひさぶめけん。ゆびより、
ちをいだゝて、妻戸ゝうちに、かきていはく、ゝう
かばねをバ、隠瑜がはゝみ、かゝはゝにたけと、か
きつくるに、人のけしきの志けれバ、さゝきて、は
てのもゝ、二三をバ、かゝさゝ、つみづゝゝれ、だび
をときて、ゝびを、ひきまゝひて、みづゝ、はゝふ

やハもの　あや
まりょハきき
ふ。

くゐりぬ。

くれなゐなるみぐにまがつみづぐきのすゑをだにこそかきもあぐるね、ほゝあれば、たえいりぬ。女房、かゝへて、なきをれども、つかひふしかゝてあけぬれば、をとこいり来てみるに、いかゞたぼえけん。ほゝばゝ、ほゝいりて、たきもあゞず。

我さへやほゝひやほゝん繋りける人ゆゑ人のたゆるいのちに、はの人〻がゐしみきけり。此女ハ、潁川の荀爽ゞむすめ、南陽の隠瑜がめ

ゐり。今ハをとこハ、太子師、郭奕といふ人ゐりむかゝ、潼の、元帝とやすみうど、たはまゝけり。三千人の、女御、后の中に、王昭君とやすみうどんは、ゐやうなる事ハ、たれもすゞれ給ひけるを、この人、帝に、まぢかく、むつれつゝまつり給はば、見れば、さゞめて、物の数なゝとあまさの御心に、いどまくれば、けり。此はなゝ、えびすの王ゐりけるもの、まゐりてやさく、三千人までさゞめらひあひ給へる、女御后、いづれまてもひとりたまはゝんとやすに、うへ、みづかゝ、御覧じつくさ

んことも、わづらひありければ、そのかたちを、えにかゝせて、人のをゝへやありけん。
此王昭君のかたちをゝん、みにくきほどよりつたりければ、えびすの王、たまはりて、よろこびひらけつゝ、ゝゞ國へぐしてかへるに、故郷をこふる涙は、道のつゆゝもまさり、わやはらかに、たちゝゝれぬるふげきは、ゝつげきゝゝのゆくすゑけうゝゝあり。かゝるまゝゝゝは、たゞゞねをのゝあけども、何のかひゝは、あるべき

うきよぞとゝつはゝつゝゝはゝゝくもか

がみのゝげをたのみけるかれ、あはれをゝゝず、ふゝけゝゝらぬ、ものゝふれども、らうたき姿に、めでゝ、かゝづきゝゝやまゝことゝ、その國はいとゝゝみゝもすぎたり。かゝれども、ふりゝゝみやこを、たちわゝれゝゝすり、けゝにいたるまで、事にふれ、をりゝゝにつけて、うれへの涙、ゝくまもゝゝ。この人はゝゝみのゝげ、くもりゝきをのみ、たのみて、人の心ゝにごれるを、ゝゝぞりけり。

和文教科書四之巻終

明治十九年四月九日版權免許
同　年同月十三日版權讓受御届
同　年同月　出版

第一帙定價金五拾錢
第二帙定價金五拾錢

編輯人　下田歌子　東京四谷尾張町九番地
出版人　平尾錦藏　東京四谷尾張町九番地
製本兼發兌元　中央堂　宮川保全　東京神田猿樂町三丁目一番地
發兌元　十一堂　明石範貞　東京京橋南鍋町二丁目三番地

賣捌元　大阪心齋橋通北久寶寺町　三木佐助